銀行券の系譜について
——岡橋教授の見解を中心として——

岡野 井昌夫

まえがき

わが国の経済は、明治維新によって資本主義に移行したが、諸外国におくれて発足したために、このことが日本資本主義の特殊な性格をつくり出した。わが国の銀行も、このため、先進諸国の銀行とは異なった発展の経過をたどっている。ことにこの特徴は、もっともも典型的な発展をとげたイギリスの銀行と比較すれば、きわめて明瞭である。どの国の銀行もその生成にさきがけて先駆的な銀行業者の活躍がみられたが、これからが行なった萌芽的な銀行業務を組織化され、近代的な銀行が成立するにあたってももっともも大きい役割を果たすのは発券業務である。というのは資本主義成立初期には、未発達で錯誤した信用関係がみられ、このからか近代的な信用制度が発生し、確立への歩みを進めると、この過程で、この時期に現われる特有な流通上の問題がそれぞれ独自な方法で解決されてゆくが、銀行券の発達はたてつのように、この発達の過程をつかなっている。ところで本稿では、岡橋教授の、イギリスとわが国の銀行券の発達に関する見解を紹介し、これについていくつかの疑問点を述べることにした。そこで岡教授の「シーケル・ピルについて」（『経済学研究』第9巻第1号）と大著「銀行券発生史論」（昭和44年）第1編、日本銀行券前史を中心として、この問題を検討することにした。岡橋教授は、銀行券の本質を「貸し付けられた手形」である点にみとめられる。そして銀行券の端緒形態をとり上げられる場合にも、範疇的な、しかし基本的なこの本質規定がもっとも重要な基準となり、銀行券の発達に関連する他の歴史的諸要因は次第にのみ考慮される。したがって銀行券を発行する初期の銀行業者の業務や資本の形成についての分析、検討、資料の解釈、またこれらの銀行業者の発生や銀行制度の発展を規定する資本主義の相違は直接の関心とはなっていない。このようなオリジナル的な視角は、一方ではわが国の金融史にかんする新鮮な分析を生み、過去を経験して来た問題を掘り起こすことになったが、逆に新しい疑問をつくり出していると考えられる。なお、銀行券の性格規定については、結論には同意を感じる点多いが、とくにその分析の仕方についてはいくつかの疑問がある。

1

資本主義初期における信用制度の生成および発展をとり上げる場合、もっとも興味のある問題は、つぎの点にあるといってよいであろう。すなわち、未発達で錯誤した信用関係のなかから、どのようにしてはっきりした性格をもった「近代的信用制度」が誕生し、確立への歩みを進めようになったかということである。この場合、このような近代的信用
銀行券の系譜について

制度は、その生成にあたって信用貨幣をつく
り出す。そして「本来の信用貨幣」といわ
る銀行券が生まれてくる過程は、銀行制度の
形態と緊密に結びついて、これをたて糸のよ
うにつなげている。したがって先駆的な金
融業者が萌芽的な銀行業務をはじめるとと
に、銀行券の端緒形態をつくり出すが、この
業者が信用業務を組織化して銀行へと脱皮す
れば、銀行券も信用貨幣として明確な内容を
もつようになる。しかも重要な点は、この発
展が銀行だけの変化にとどまるものではない
く、実に資本主義の生成にともなって、また
資本家的な再生産が確立への道を進めてゆ
くことを基礎として出現するという点にある
よう。このようなにして民間の銀行の発券は、
さらに公的な中央銀行の発券に代わられ、
結局はこれに吸収される。ここであらた
めて指摘するまでもなく、複数の民間の銀行
による発券は、最終には単独の中央銀行によ
る発券の集中を実現するようになる。しか
この銀行制度の生成と発展は、国によってま
たくちがった特徴をもっていて、どの国も
共通な経過をたどっているわけではない。資
本主義の生成と発展のしかたが、国によって
異なっているからである。たしかに中央銀行
が発券業務を開始するまでには、これにさき
だって民間の金融業者および銀行による発券
の前史があったということは、主な資本主
義国のいずれについても共通にみられる。こ
れはきわめて自発的に、その意味で典型的な
発展をとげたイギリスの銀行制度については
もちろん、おくれて発展をとげた諸外国にお
いても同様である。ただ例えばドイツでは、19
75年に中央発券銀行としてライヒス・バンク
（Deutsche Reichsbank）が設立されたが、こ
のとき株式および個人銀行で発券を行なって
いるものが32行を数えていた。またアメリカ
では、周知のように連邦準備制度が成立する
までは、長期間にわたって中核機関のない、
無統一な、タイプのちがった銀行による発券
が行なわれていた。わが国でも、明治15年、
日本銀行が設立されるまでに、為替会社、国
立銀行による発券が行なわれていたことはよ
く知られているとおりである。しかし、この
推移を信用制度あるいは銀行制度の発展とし
てその内容と特徴を考えるとすれば、むしろ
国による相違の方に注目しなければならない
であろう。わが国の銀行制度は、しばしば指
摘されるように、おくれて発足した資本主義
を基礎としていることによって独自の道を歩
んで発展している。これに、もっとも典型的な
資本主義的発展をとげたイギリスと比較す
れれば、その相違はきわめて明瞭である。そ
そこで、まずイギリスを中心にとして、銀行券か
らなる岡崎教授の見解をみてゆくことにしたい
よう。教授は、イギリスの銀行券の初期の歴
史のうち、ときにイングランド銀行が設立当
初に発行した紙幣信用に注目される。そして
同行がランニング・キャッシュ・ノート（run
ning cash note）、アコントブル・ノート（acco
mptable note）、およびシールド・ビル（sea
led bill）という3つの形式の紙幣を発行し
ていたことを指摘される。そしてこれに説明
を加えて、3つ証券の性格をつきののように
見ておられる。すなわち、第1のランニング・
キャッシュ・ノートと第2のアコントブル・
ノートとは、ともに預金の領収証である
が、性格がちがったものとされる。前者は要
求次第記名本人、あるいは持参人に支払われ
る約束手形の形式をとっており、預金が一部
支払われるとその額が手形面に書き入れら
れるものであった。これにたいして後の者
アコントブル・ノートは、預金者が銀行にたい
してノートを振出すことがとめられるもの
なのであり、demand noteあるいはdrawn
noteであった。そして引出された預金額は
この紙幣の裏面に書き入れられるようになっ
ている。1896年に当座勘定（drawing account）
がひらかれてからは、このアコントブル・ノ
ートにも本人または持参人払いの形式がとり

44
銀行券の系譜について

入れられたが、この使用はその後廃退した。そこで岡橋教授は、このアコンダブル・ノートは、当座勘定といっしょになって、「このノートから預金貸付が発展してきたのである」といわれる。いわばこれはこのノートを小切手の系列に属し、銀行券への発展の系譜をはずれたものであるとされる。そこでこの両紙券にかかるかぎり、ランニング・キャッシュ・ノートの方を重視する。後者が手形形の代用通貨として流通し、こんにちはの銀行券へ発展していったと考えておられる。ところがこれを第3のシールド・ビルと比較して、いずれが「正式の銀行券」であったかをとり上げられる場合には、必ずしもその結論は明確ではなくなる。この点をさらに教授の見解をたどることによって明らかにしてゆこう。教授によれば、第3のシールド・ビルは、最初政府への貸付の払込（loan instalments）につかわれた利払い手形であって、記名本人またはその受益人宛てに発出されたことに注目される。そして著名な『イングランド銀行史』の著者 Clapham教授がシールド・ビルを、同行の設立立法によれば公然と企図された、唯一の紙券だと規定していることから、3つの紙券のうちでも数っとも正式なものだと説いていることに関心を寄せられる。しかし同時に Clapham教授が他方ではランニング・キャッシュ・ノートが正式の銀行券となったと述べている不確かな点を批判する。ところが、Coppietersは Claphamから多くの援用を行いないながらも、その態度はきわめて明白である。すなわちシールド・ビルをもっとも典型的な銀行券と考えている。岡橋教授は、この両者の異なる見解にたいして Coppietersのように、シールド・ビル説をとっているように見える。これは以下の紹介から明瞭となるであろう。もっとも教授は、この場合、さらに一步を進めて Claphamや Coppietersが実証的にのみ考え、とくに掘り下げて考えようとしなかった理学的検討を行なわれている。すなわち抽象的にこれら紙券の性格を確証にしようとしている点でその見解にいちじるしい特色がある。あるいは、むしろ、岡橋教授の所説のもっとも積極的意味で独特性は理論重視にあるといった方がよいであろう。そしてさらにもう一つつけ加えなければならないことは、同教授はわが国の銀行券の源流と系譜についていえどもつまり興味をもっておられ、これについて独自の解釈をもっておられるところである。したがってイングランド銀行の紙券についての考察は、実は戦局のない、わが国の銀券の系譜を、両者の予定手形 → 焼替会社の値段手形→国債銀行振出し手形→国債銀行紙幣 → 日本銀券というつながりで理解しようとする教授の分析のいわば予備実験にあたるものである。しかし、ここではまず最初に、イギリス問題限定して先に進むことにしよう。教授はランニング・キャッシュ・ノートとシールド・ビルを質的にもたがったものとみられる。そしてこの両紙券のちかいを、焼替会社の差加金預り手形と正金無利息手形のちかいに擬していられるようである(5)。ともかくシールド・ビルについては、この紙券を近代銀行券の先駆とみる諸家の説から、とくにその論拠をひき出して、それぞれに特有な鋭い批判と検討を加えられている。そこでこの検討の紹介からはじめるよう。

まず山下宇一教授のランニング・キャッシュ・ノート否定説については、つぎの点を問題とする。山下教授が、「銀行手形が貨幣的流通を考慮した一定の（端数）金額を単位として発行された点に重点を認め」られ、また「イングランド銀行のシールド・ビルは、同銀行においてその育成に最大の努力を払ったものであり、かつ後世銀行券制度の端緒となったものと考え(6)」されている見解を、とくに前者の部分についてとえ上げられている。そして山下教授のいわゆる「通貨的流通の便宜」からいって、額面金額に端数
銀行券の系譜について

ないことは、銀行券にとって重要な要件であることに同意される。しかし、この要件は、たんに「通貨の流通の便宜」のためだけのものではなく、公債や株式などにおいても同一であり、したがって額面金額がロンドン・ナンバーだからということから、逆にその証券の通貨性を結論することは早すぎると批判される。そして岡村教授は、むしろシールド・ビルの額面が100ボンドという高額であり、この点が「通貨的流通」にとっては不便であったことを問題とする。つまりに小野朝男教授の裹書議論～流通性を特別に重視する見解については、つぎのように反論される。すなわち小野教授が「1694年のイングランド銀行の設立とともに、この銀行の発行する約束手形の一種たる貸付手形または証書(all and every Bill on Bills obligatory and of credit under the Seale of the said Corporation made or given to any person or persons)は、その設立を規定した法令 the Ways and Means Act（財源法一筆者）の第29条により、裹書議論、つまり流通がみとめられていた。……イギリスにおいては、17世紀から18世紀初頭にかけて、普通法上においても、一部約束手形の裹書議論がみとめられ、いわゆる約束手形が流通性を確保していたことは明らかであった。しかも the Ways and Means Act の第29条に示すように、このようにして流通性の与えられた約束手形のなかには、イングランド銀行の発行する約束手形、つまりイングランド銀行券の端緒形態が入っている。したがって、イングランド銀行が近代的銀行の最初の形態とすれば、この銀行の発行する約束手形が完全な流通性を獲得することは、近代銀行の発行する信用証券、つまり銀行券が通貨として機能することであり、いわゆる銀行通貨の生成である”的」と述べられているのにたいして、つぎのように反論される。すなわち、シールド・ビルの裹書議論～流通性はかならずしもその通貨性を意味するものではないと考えられる。というのは、シールド・ビルの流通性が投資対象としての有価証券の流通性であり、これはこの証券が利き手形であったことがつながりよりも有力にこれを説明しているとされる。そして Richardson に依拠して、イングランド銀行の1694年8月2日付の記録によれば、「たとえも、イングランド銀行に貨幣を払ってしまったので、のために銀行の帳簿にかれた名前に記入されるというよう、このことが順調にはこばれ、銀行のシールド・ビルが与えられた」とこと、そして同じく9月19日付の記録により、「株式取引所でシールド・ビルは引きかえに貨幣を提供する者に引渡すため」という（傍注筆者）に2万ボンドのほるシールド・ビルが発行されていることをくにとり上げ、つぎのように説明される。シールド・ビルが小野教授のいうように「本来通貨つまり銀行通貨として機能するものであるが、この証券を直接兌付けて利子を稼げばよいのであって、これをわざわざ貨幣と引き換ええてその後で手に入れた貨幣を貨付けるというような回り道をとる必要はないといわれる。銀行は利き資本として利価しうる貨幣を入手するために、利き資本シールド・ビルを発行するのであって、貨幣所有者にとっては投資証券であったととされる。そして Clapham を引用して、シールド・ビルは初期には100ボンドにつき2ペソスの日歩がついていたこと、1698年から利子のつかないものであったが、22年間（1694－1716年）はたいてい利子がついていたこと、また政府はシールド・ビルを現金のように受取り、依頼者に支払ったが、多量に流通はしなかったこと、さらにイングランド銀行と取引を行なっていた人たちが、このシールド・ビルを国庫や、依頼者にたいする便利な支払手段と考え、あるいは隔地間の送金金替の便利な代用手段をとみていたことを明らかにされる。結局、教授は、シールド・ビルが無利子の場合もあり、国庫も無利子のものを受取っている
銀行券の系譜について

記録はあるが、それでも本質は「短期の投資物」と考えておられる。もっとも、さきに紹介した小野教授の著書では、ランニング・キャッシュ・ノート、法律上正式ではないが、事実上は金銭手形のそれになって裏書譲渡が認められていることから、また現金手形は法律上正式にその裏書譲渡が認められていてばかりならず、ランニング・キャッシュ・ノートによって取得して代わられたことから、系譜的にはランニング・キャッシュ・ノートが近代的銀行券の先駆とされる。そしてその上、なお法律上の裏書譲渡に執着され、これを根拠として「来来通貨つまり銀行通貨として機能を許された最初のイングランド銀行券は、現金手形である。論理的歴史的には近代的銀行通貨の先駆者」とあると同じく、シールド・ビルに固執される。ところで、後にみられるようにシールド・ビル説の根拠にかんするかぎり、岡橋・小野両教授の見解は、まったく異なっているが、これは後にふれよう。岡橋教授は、つづいてシールド・ビル説とされる渡辺佐平教授の見解に言及される。すなわち、Clapham がシールド・ビルを 3 つの端緒形態の紙券のうちで、もっとも正式のものであり、また設立法のなかで公式的に発行のみとされた唯一の紙券信用だと思われている点、そして渡辺教授がこのようなシールド・ビルの発行こそがイングランド銀行を特色づけているものだとよく強調されている点に着目される。渡辺教授の見解の特色は、イングランド銀行が行なった紙券は、たんに金銭がすでになしとけていた紙券の貨付という金融技術を受けついだものではなく、形態的な発展をとげ、流通しやすくなったと考えられている点にある。そしてこのことはさらに銀行の貨付の能力を拡大した。このように広く流通する紙券の発行に主として依存していたのが同行の特色であると考えられている。渡辺教授の見解をさらに具体的に紹介すれば、「この紙券は裏書によって譲渡しうる手形であって、持参人払いになっていった。これは宛名のほかはすべて印刷されていて、額面の金額も普通は 100 ポンドであった。ことに形式のうえでも、ランニング・キャッシュ・ノートとの差異はみいだされる。この手形には 1 日につき 2 ペンスの利子がついていたけれども、預金の受取証書として発行されたわけではない。銀行は資本金の額面額の値段を保有しないでもこの手形を発行した。したがってこの手形をつくり出すことによって、同時に貨幣貨付の能力をも拡大した。この点からみて、イングランド銀行が発行した数種のノートのうち、このシールド・ビルがいちばん新しい種類に属していたのであった」というわけ。すなわち、これによると、渡辺教授はシールド・ビルが、貨付の能力を拡大したことにもっとも大きい意味をもっておられるようと思われる。そして岡橋教授はふれておられないが、渡辺教授のこの評価は、もっともイングランド銀行創設の意義を旧式金融機関の没落を決定的にし、高利資本の敗退をもたらした点においておられるから生じていると思われる。それは銀行が国庫を高利の負担から解放し、当時の金融市場に積極的に低利の貨付を行なうというドレッティックな政策をとることをとくに強調されているからである。それはもっともとして、岡橋教授は渡辺教授の見解のうち、ときにイングランド銀行の特色を紙券通貨の貨付・信用の創造にかかれた点だけをとくに大きくとり上げられる。しかしシールド・ビル説の決定的な根拠については渡辺教授の見解とは異なってくる。そしてシールド・ビルはこれが政府貨付金に使用されたこと、しかも、資本金の払込みが実際にには 3 年以上もかかってようやく完了したにもかかわらず、政府への貨付は 1694 年の 8 月 4 日をはじめとして、その年の終わりごろまでには完了してしまったことに言及されな
銀行券の系譜について

から，結局このシールド・ビルを同行の利
付金債券であると結論される。またシールド
・ビルの性格規定について主要な点は，これ
が利付金債券であったかどうかということで
あって，その債務者が政府か銀行かというこ
とは大したことではないといわれる。この
ようにして岡橋教授は著家の検討をつうじて
，しばいにシールド・ビルの利付金債券とし
ての性格を強調されるようになっている。と
ころでききに指摘しておいたように，岡橋教
授は，ランニング・キャッシュ・ノートとシ
ールド・ビルを質的においたものとみてお
られた。すなわち，くわしく引用すれば，「と
ところがランニング・キャッシュ・ノートとシ
ールド・ビルとは量的というよりはむし
ろ質的においたものであって，為替会社の
差加金預り手形と正金無利息預り手形とと
いてるのだが，むしろ質的においたものであ
って，為替会社の差加金預り手形と正金無利息預り手形ととのあ
いだにおける本質的なちがいをおなじめものがあ
るようになりえる」といわれる。つまりランニング・キャッシュ・ノートを為
替会社の差加金預り手形とみられ，シールド
・ビルを正金無利息手形と同一の形態のもの
とみられているように思われる。これは次節
でさらに検討するが教授がランニング・キャ
ッシュ・ノートを為替会社の正金預り発行預
り手形と同じと考えられ，差加金預り手形
や，さらには利付の外預り金手形と同一
類型に含めて考えられていることによってい
る。すなわちランニング・キャッシュ・ノー
トは預託金を集めるための手形であり，銀行
券の系譜から脱落したものであり，これにた
いてしてシールド・ビルは，利息をとって政府
に貸付けられた手形であり，「通貨として機
能する信用（支払義務）が貸付けによって手
形に化体」したものと考えられていたように
みえる。ところがこの区別を一貫されない
で，これまで紹介した検討，とくに渡辺教授
の見解の批判にさいしては，ちがった観点に
移行される。すなわち当初は「政府への貸付
金の支払いに発行されたこの利付金のシー
ルド・ビルは，貸付けられた銀行手形とし
て，まさしく，近代銀行券の先駆形態という
にふさわしいようにみえる」と（後述筆者）と
考えられながら，これが利付金債券であるこ
とを強調されるようになるとともに，つぎの
ようにいわれる。「シールド・ビルが……利
付金債票だとすれば，それを貸付けること
は，……債券発行銀行が貸付資本を入手する
ために発行するところのごく一部の金融債券を
貸与するのと，本質的にはすこしもかわら
ない」といわれる。シールド・ビルは，「……
銀行に債票を払い込ませと与えられた，ま
た株式取引所で貨幣と引き換えに手に入れ
ることもできたが，そのように投資証券として
貨幣にかえらるものを政府が借りうちたので
あって，この貨幣入手の手段そのものは貨幣
として機能しない」といわれる。したがっ
て「シールド・ビルで手に入れた貨幣を貸付
けることによって，……原始的な信用の創造
をおこなうことができた」と。すなわち「債票
がなんらの準備によって裏付けられていない
ものとなった」が，このような原始的な信
用の創造は，金銭がすでに実行していたとこ
ろを受けついただけであり，なんらイングラ
ンド銀行を金銭から区別し，特色づける契機
ではないとして渡辺教授を批判される。

（1）「イングランド銀行の成立とイギリス
金融制度の展開」学習研究社「経済学研究年報」191。
（2）加藤俊彦「日本の銀行」（大島・加藤・斎
藤・玉野井『金融論』東大出版会，第5章）。
（3）「陸橋保『シールド・ビルについて』『経済学
研究』第28巻第1号）。
（4）これら紙幣の名称については，それぞれ現
金切手，当座切手，押印手形という訳語で十
分であると思われるが，本稿では，引用文献
にしたがって，「の外預金，あるいはいが
った訳語をそのまま使用した。
（5）渡辺『前掲論文』7頁。この点は，岡橋
教授の後の論著と一致しない点もあるが，
くわしくは本文を参照されたい。
（6）山下源一「（イングランド銀行）設立事
情」（『松山商科大学創立30周年記念論文集』
昭和28年）170頁注30。
（7）小野源『イングリッシュ信用体系史論』東洋経
銀行券の系譜について

新報社，212—3頁。

(10) 小野「前掲書」213頁，脚注1)を参照されたい。
(11) 渡辺佐平『金融論』岩波全書，81—3頁。
(12) 渡辺「前掲書」83頁。
(13) 渡辺「前掲書」86—7頁。
(14) 政府の行革とその相関が，シールド・ビルの発行に aph 具の報態を規定するようになるのはないであろうか。
(15) 注2)を参照されたい。
(16) 関橋「前掲論文」16頁。
(17) この場合に銀行の性格，信用の基礎を考慮しないで紙幣の形のみで，このように結論してよいのであろうか，鈴木指摘であることを認めた上でなお疑問がある。
(18) 関橋「前掲論文」17—18頁。

2

以上述べたように，岡橋教授はシールド・ビルについては，利払い債券であるという点を力誇る。しかしこの利払いであったシールド・ビルが，漸次無利子に化したとすれば，この紙幣は，このときこそはしてそれも銀行債から通貨に転換する時期である。そうしてこの無利子のシールド・ビルがいま利子をとって貸付けられて流通界に出ていくとき，それは銀行券としての性格を完全に獲得したものということができる金华ら）と考えられる。しかし「無利子のシールド・ビルが発行されたこともあったかがそれがそのまま流通し，発展せず（）やがて利払い国庫証券と競合するにいたって，利払いシールド・ビルが結局発行されなくなったことを指摘される。この事実は「シールド・ビルが銀行債としての性格をもちづけていたことを示すものであって，このような利払いシールド・ビルのなかにイングランド銀行の先行形態あるいは端緒形態をもとめることは正しいとはいえいかえないであろう（）」といわれている。教授の見解は，はっきりしない点もあるが，要するに利払いであれば銀行債であり，銀行券に発展する契機をもたないが，無利子になれば通貨化に転換し，これが利子をとって貸付けられれば，銀行券としての性格を完全に獲得すると考えられているといえる。ともかく，いずれにしろシールド・ビルは無利子になるということを条件としてそれはあるが，銀行券として発展したことを含みとして残しておられるようである。ところが，銀行券の先駆形態として発展が大きいシールド・ビルについてはこのように詳細な検討を加えておられるが，ランニング・キャッシュ・ノートそのもののについても，あらためて検討し考察される意図を示しておられるにもかかわらず，残念なことにこれまでのところその見解を知る機会がない。けれども，すでに前節でとり上げた検討によって教授の意図はかなり明瞭である。というのは，これらの分析の結果，ランニング・キャッシュ・ノート説をとられるようになっているからである。またすでに指摘しておいたように，教授の見解の特色は理論の領域においても，シールド・ビルの検討においても，信用貨幣としての銀行券をどのように規定すればよいかという理論的問題の分野に，まず第一義的な大きな狙いがあるといってよいであろう。その意味ではさきにもふれたおたがい，イギリスの紙幣についての考察は，いわば一つの実験あるいは検証といるべきである。演説的メートロノートの一つのテストにすぎない。この点が実証よりもとついて，銀行券の端緒形態を求めようとし，そのかぎりで経験的な史実に執着し，あるいは別の要因を廃棄し，または少なくともこれから理論化を進めてゆこうとする諸家の態度といえども，同調におけるは，極端ないかをあえてすれば，銀行券の原形をシールド・ビルに求めようとランニング・キャッシュ・ノートに求めようと，これは第二義的な問題であり，教授の説を支持された信用貨幣についての理論的本質規定に合致することこそ最初に重要なのである。規定に合致
銀行券の系譜について

すなわち、教授の視点に沿ってもそれなりに首尾一貫した説明を貫徹できるという自信をもっておられる。そして銀行券の端緒形成という歴史的テーマに名が借りられないで、教授にとっては実際にこの問題はすっごく理論的問題となっているよに思われる。

ところで、教授の検討はすでに述べたようにイギリスにとどまらない。さらに詳細なわが国の銀行券発行史の問題に進んでいる。すなわち教授は近著『銀行券発行史論』において、日本の銀行券の系譜を明らかにしておられる。この著者著書は、もとよりなる銀行券発行史ではなく、スケルの大きいかわが国 Drops 金融史と呼ぶ方が適当なものである。しかし、そうはいうものの著書は、わが国の銀行券の系譜についての理論的規定と、わが国の資本主義の生成確立にたいする金銀比値、ときに銀の価値下落の役割の分析という二つの問題を焦点としている。したがって、前節でとり上げた「シールド・ビル」についての論稿と同様、歴史的テーマではあるが、その実体は一つの理論的分析である。

この点から jeżeli、この本は、以上の「不換銀行券論争」において、教授が抱え、所の知識、また論争をつうじしつてに外延をひろげて構築された「信用貨幣説」のコンセプトな、明治期における貨幣、信用問題への適用である。といても、本書は 3 つの部分から構成され、3 つの編がそれぞれ日本銀行券発行、日本銀行券の生成、日本銀行券の確立という歴史的順序を追った編制となっている。しかし、これが銀行券に集中して 3 つの時期の変化をたどるという内容のものではなく、銀行券発行史をもっぱら視野をかぎったもので、第 1 編だけである。第 2 編では第 3 章において新貨条例から貨幣法までの明治幣制がとりあげ、第 4 章では松方財政金融政策に関する通説的解釈に批判が加えられ、第 5 章では明治15年の日本銀行発足から18年発券開始までの日本銀行の役割について新しい意義づけが行なわれている。したがってこの3つの章はいずれも直接に銀行券を対象としたものではなく、「徳州拓卓な①」意味をつけて金融分析の集大成である。また第 3 編も同じように 3 つの章から構成されている。

これも第 7 章の一部をのぞけば、直接に銀行券のみを問題としたものではなく、別の問題をとり扱ったものである。すなわち第 6 章では、明治 21 年の保証準備制度の限方の採用、23 年の政府貨幣の意味が検討され、第 7 章では、日本銀行券の発行区分の構成変化および日清戦争時の物価騰貴にかんする分析が行なわれ、第 8 章では、明治 30 年の貨幣法にもとづく貨幣制度がなぜ平穏に実現したかという問題意識から出発して、明治 4 年の新貨条例以降の価値尺度の変遷と価格の標準的推移について独特な説明が行なわれている。

したがって「銀行券発行史論」という表題は、第 1 編にももっともふさわしい。この第 1 編は 2 つの章に分かれ、第 1 章ではすでに前節でもとり上げておいた為替会社の正金無利息預金手形を、また第 2 章では国立銀行紙幣がとりあげられている。そこで、第 1 章の初めに述べる。第 1 章では明治 2 年 6 月大政官令達による通商税の極度にもとづいて創設された為替会社の発行した「会社切手」が紹介される。すなわち為替会社の発行した手形には、当時、(1)差加金預金手形、(2)預金為替手形、(3)三重七分五厘預金小札、(4)正金銀行為替手形、(5)金銀為替手形の 5 つがあっ

ところが第 1 の差加金預金手形は元金または元金の預金証を、差加金預金証書を、くれやすくといえば根拠のことは説明され、会社預金とも呼ばれていた。この評価は前節の場合とは異なる。また第 2 の預金為替手形とは、これに差加金証書でもあり、要求不能であったのが 3 か月以上にわたる場合には利息がつけられ、第 3 の預金小札は、差加金預金手形、為替切手などともいわれ、為替会社発行の小額通

50
銀行券の系譜について

貨であった。そして銭券および銭券とも呼ばれているものである。第4および第5の為替手形は金券あるいは洋銀券と呼ばれ、正金銀または洋銀兌換券であった。したがってこれら5つの手形は性格の異なるものであるが教授は銀行券の系譜に属するといいがたい最初の2つを除外し、第3の銀券、銭券からその性格規定をはじめめる。この「銀三両三七分五厘」札は、小額通貨の不足を補うという名目で発行されたものであるが、この銀券、銭券は官札の預け入れにたいする預り手形であり、いわば支払官札に兌換される「引替切手」でもあった。この点から、銀券、銭券は正金銀札の小額径の形をとった代替物である。しかし岡橋教授はこのことから銀券・銭券が正金銀札の規格を模となすと考える過誤の考えをしりぞけられる。そしてこれら金貨または金地金と兌換される兌換銀行券に対しても、両者ちがいと同一性を明らかにする。この場合に教授の説明はつぎのとおりである。銀券・銭券が政府紙幣と引き換えられ、これにたいして兌換兌換銀行券は金貨または金地金と兌換されるという点では両者はあきらかにちがっているが、両者いずれも銀行の手形であり、債務証書であるという点ではまったく同一であると考えられる。もっとも、銀券や銭券は、銀行券と本質的に同一のものではなく、しかし、その萌芽とみるべきものだといわれる。そしてこの論拠は、銀券・銭券が兌換されるさいに預け入れられた正金銀札が実際にには為替会社によって貸付けられており、そのかぎりで銀券・銭券が仮空の預り手形となっているからだとされる。いいかえれば金札で証明されているたんなる保管証書から、その証明のない預り手形へと、あるいは金札の支払を約束する手形へと変化したことを重視される。そしてここに為替会社の信用創造の第一歩がふみだされたことを指摘される。しかしこの銀券・銭券は預り手形にとどまり、為替会社としては手形を貸付けるという積極的な信用の創造までは行まっていない。したがって銀券・銭券は流通する商業手形と同じであり、商業貨幣にすぎないとされる。そこで信用貨幣の先行形態としては、別の種類の手形を求められることになる。金券にはいくつかの種類があるが、教授が注目されるのは正金銀または洋銀と引替えに発行されるものである。この観点から小額太政官札の代用として金札と引替えに発行される老札券を除外される。この正金預り手形である金券は、その兌換は、はじめ武分判で、そして明治4年に造幣局ができてからは新金貨でなされた。また金券は無制限法貨であったが例外的に関税については制限法貨と規定されている。このように金券は正金兌換の法貨であったが、その金準備については別段の規定はなかった。そこでこの金券発行をつうして「預かった正金は貸し出されて無準備の金貨ができたばかりでなく、さらに、そのような預り金券が、積極的に貸し出されるようにさえもって来たのである」といわれる。このように正金預り手形としての金券を、銀行券の先行形態としてもっとも重視される。そして金券のうち、正金無利息手形こそ銀行券の先行形態であるといわれる。ところが、ここで教授の分析には、一つの動揺がみられる。というのは、さきにみてきたように銀券・銭券は貸付に充てられることはなく、銀券・銭券と引き替えに預った太政官札は貨しつけられるのであり、銭券・銭券の発行はせいぜい原始的な信用にとどまるものと考えられていた。ところが「このような為替会社の債務信用が、商業手形の流通にささえてされ、さらに、積極的に、貸し出しされるようになる」とことをつけ加えられる。しかしその具体的な例として、商業手形流通をではなく、銭貨の規定取引をあげられるのは何故であろうか。すなわち明治初年にみられた銭貨の打歩を利用して、為替会社は「十貫文の銭券と引き替えに預かった老札の
銀行券の系譜について

金札でもって拾絢八百文の銅銭を入手し、それと同額の銭券にかえることができた。かくして、銭券拾絢文を発行して拾絢八百文を回収しろうことになる。「このことは、銭券や銀券が金札と引き換えに発行されるばかりでなく、さらに、貸付をつうじても発行されたことを意味し、銀券がたんなる金札の預り証記より手形から貸し付けられた手形へと発展していることが推察される。さらに、預金の蒐集、保管、貸付が為替会社の業務となる。手形流通の発展から、それらが個人や私設商業手形にかわって為替会社の手形が貸し付けられるだけでなく、また種々の貸付をつうじて為替会社の手形が発行されることが可能となった」といわれる。要するに、さきの箇所では、銀券・銭券は商業貨幣とも定まるとされただけ、貸付取扱にこれが利用されるようになれば信用貨幣となり、教授のいわゆる「貸し付けられた信用の通貨形態」に発展するといいかえられている。この場合、言葉の上ではその論拠として手形流通をあげられ、これにささえられて貸付に使用されるようになったと説明されるが、しかし、すでにみてきたように具体的例としては、銭兌の貸付取扱枠が広がるにとどまっている。そしてこの貸付取扱における貸付・銭券の発行がどのような意味で、「貸付をつうじても発行されたことになるのか、はっきりした説明がないうちに、拾絢八百文の銅銭→拾絢八百文の銭券へと変化し、結局八百文の余剰、利子を生み出すようになることを指してあるのだろうか。それとも上の過程でいずれは結果的に流入する銭兌を予定して、個別に銭兌を発行して貸付を行なう方があったといわれるのであろうか。いずれにしても、さきには貸付に用いられなかった銭兌・銀券がここでは貸付けられた手形に発展している。これは、なにか別の考慮から、銭兌銀券と金券を並列したことを都合が悪いと感じられるようになったためであろうか。もとから同じ紙券が発行方式が変われば、ときには商業貨幣にとどまり、ときには信用貨幣に発展する。もっとも、このような多少の動揺と混乱はあるが、教授が先行形態の本命として重視されるのはもちろん金券であり、別の名前によれば正金無利息預り手形である。「このような金券は、最初、正金銀と引き替えにのみ発行された紙券通貨であり、100ペーセント準備の預り手形であったし、またいつでも正金銀に引き替えすることのできる要求払いの手形でもあった」といわれる。したがって、利子はもちろんであってなった。けれども、この預かった正金銀が貸し出すされるようになり、それと引き替えに発行された正金預り手形は、もはや、正金準備によって保証されたいものとなった」といわれている。そして「さらに、そのような預り手形そのものが利子をとって貸し付けられるようになって、その発行額が急激に増大していったのである」という。教授は、この増大を大阪為替会社の金券発行増加額にたいする実際流通高の比率の90パーセントという高い割合（もっとも東京為替会社は55パーセントでそれはどの程度で）を実証される。また兌換準備については別段の規定はなかったが、明治3年6月でと同様大阪為替会社が54.1パーセント、東京為替会社が53.1パーセントである。ところが明治3年から金券の発行を規制しようとする動きがみられるようになった。その例としては、当時の通商・為替両会社の総裁配司、三野村利左衛門の起草になる「為替会社規則見込書上」では、発券高を身元金と同額に限定する規定が盛られていると、大阪通商の同様によれば「金券の一部を通商司に預託させ、その流通を抑えようとする意向を示している」と、またこの時期から大阪為替会社の勘定科目に正金準備金を構成内容とする「石庫納」の数字がみられるようになった。
銀行券の発行方法について

よれば、80パーセントの正金準備が規定されていること、東京為替取引では、正金と引き換えに発行されていない「正金無利息預り手形」は引き渡すよう通商司より厳重な金形等の動きがあった等があげられている。このような発行規制や兌換準備充実の影響によって金券の流通高が減少し、「それら金券は、いずれも、正金引換発行金券ばかりであって為替会社の信用創造は、預かった正金を貸し出すので正貨によって保証される金券ができてくるという伝統的な信用創造のみにかぎられるようになった」といわれる。そしてこのようにして、身元金やさらに正金有高が金券流通高を左右する状態となれば、岡崎教授によれば、「金券は、正金と引きかえに発行される全額準備の預り手形にひきもどされ、折角の近代的な信用貨幣への発展の背景が失われた」とされるとされるのである。たまたまこの頃は、正金引換発行会社の信用がかたりついてあったが、この国民銀行は、主管として伊藤博士の建白によるものであった。すなわち、アメリカから帰国した伊藤博士は「ニューヨル」という方法による銀行設立を大いに奨励強調したが、この銀行は国債を資本としていた。彼は金札引換公債を発行して不換政府紙幣をいったん公債にかえて、これを基礎に銀行券を発行すれば、不換紙幣の整理をすすめることができると考えていたが、そのとき考えていて銀行券は、正貨兌換にもとづくものではなかった。これにたいして、吉田清成はアメリカ的な分散型の発行制度に反対し、イングランド銀行を模範とした「ゴールドバンク」の組織にもとづいて兌換制度の採用を主張した。この両者の対立は井上詫の裁決で妥協案ができ上がった。明治5年に成立した為替銀行制度において、資本金の4割を正貨をもって払い込み、これを兌換準備にあてることの正貨兌換を規定した点では吉田案が貫徹したといわれている。また、これによって為替会社は、第二国銀行に改組され

た横浜為替会社をのぞいて、いずれも解散することになり、その金券の流通高も禁止され、明治7年9月末には国回絡兌換が完了した。ところが岡崎教授によれば、この為替会社の発展は「政府の金融政策の無効からおこったものであった。国民銀行の新制度のもとにあっても、その紙幣の発行よりも預金手形の発行のなかに、近代銀行業への発展の芽が力強く伸びていることを知らせてはあきらかに信用創造の道を押えられては、為替会社の発達も、国民銀行の発展もあきらめないわけである」という。そしてこのような発行の延展は為替会社の正金無利息預り手形から、為替銀行の預金手形や紙幣兌換紙幣へとしつつ覚えたと考えられる。したがって、明治5年の為替銀行条列にもとづく金貨兌換紙幣が失敗したのは、この銀行券が金貨と共換されるものであるために、岡崎教授は選用すべき、結局正金引換発行金券となって、いわゆる積極的信用創造の道がとされることになったからということになる。そして明治9年の為替銀行条列改正によって為替銀行の紙幣、預金手形の発行が行わわれるようになり、これら紙幣の流通は急激に拡大した。この拡大は、つとうは改正国際連合条列の根本的な特徴にもとづくと考えられている。すなわち、銀行紙幣の金兌換が通貨銀行紙幣兌換となったことにより、また資本金の8割を公債証券をもって供託し、同額の銀行紙幣を発行し、2割をもって引換準備とするという改正によって、為替銀行は金準備なしに資本金の8割まで（従来は4割）の銀行券を発行できるようになったためである。またこの改正は為替銀行の設立を容易にし、その数を増加させたといわれている。ところが岡崎教授によれば、「銀行紙幣の流通の範囲拡大は、たんに通貨兌換や業務の有利化などによるものだけではない」いう。すなわち政府紙幣兌換の銀行紙幣が金貨兌換の銀行紙幣と同様に、その本質がや
銀行券の系譜について

はり信用貨幣であり、その流通の基盤であるところの手形流通の拡大、発展がその間にあつたことに注目すべきことを強調したいと
といわれる。要するに教授は、教授の、銀行券の本質規定に合致して信用貨幣となっているから、その流通が拡大したとされる。これ
をとり上げられる場合、ここでは金貨兌換の有無は問題としていないが、さきに条例改正前の銀行が失敗したさいには金貨との兌換
正金と引き換えに発行が行なわれたことが原因であるという重要な指摘がある。このように兌換の取扱いが一貫しないことは、まず第
1に問題としなければならないであろう。

また第2には信用貨幣としての特徴を、ここでは「貸付けられた手形」にすることではな
く、わざわざその流通の基盤であるところの手形流通の拡大、発展においておられる。しか
し、実際には国立銀行では貸出にさいして商品流通を基礎とする手形の制限は少なく、圧倒的
部分は貸付によるものであった。この実態をどのように受けとめられるのであろうか。また国立銀行の新制度のもとでも、近代
銀行業への発展の芽として重視されているのは、発出手形である。しかし、この重視され
る振出手形も量的にいえば銀行紙幣に比べてきわめてその利用は少ない。またこれは「預り
金証券」であり、これを信用貨幣と断定されている根拠となっている第十四国立銀行北海道
支店発行の銅貨手形の例も、その引用を検討してみれば、教授のいわれるほどはっきり
した貸付けられた手形、信用貨幣としての性格をもっているとはいええない。
このようにみてくれば、銀行券の本質について理論的
規定はきわめて明快であるにもかかわらず、
それを現実のそれぞれの紙券に適用される場
合には、かなりの混乱と無理な解釈がみられる。
いずれにしても複雑な現実を分析するに
さいして明快さが欠けてくるように思われ
る。そこで、終わりに、教授の見解を明らか
にする意味で、それぞれの紙券の形態規定を
段階的に整理された箇所をとり上げてみよう。
すなわち、もともと貨幣取扱業者の債務証券は、
(1) 單純な貨幣の保管証券→(2) 利子つき
預り手形→(3) 商業貨幣としてのたんなる預
り手形→(4) 貸付けられた預り手形（信用貨
幣）へと発展するといわれる。そしてこの第
3形態において、貨幣取扱業者が預った貨幣
を貸付けるようになれば、この預り手形は預
金の裏付けをもたなくなるので積極的信用創
造が行なわれる。さらに第4形態の預り手形
が発行されるようになれば、積極的な信用創
造が行なわれる。この第3形態から第4形態
の預り手形を発行するようになったとき、貨
幣取扱業者は、近代銀行業の先駆者へと転身
するというふうに整理されている。そして「預り手形の銀行券への転化が完成するためには、産業資本の確立をもたなければならない」と
といわれる。ところでは「それに従属する貸付資本、ことに擬制的貸付資本の運動において
預り手形は銀行券に成熟する」のである。この統一的な理論的規定にしたがっていれば、
為替会社の銅券・銀行券は第3形態から「第4
形態の預り手形にかわりつつあり」、また「
正金無利息預り手形は、すでに、第4形態の
預り手形に転化していた。ところが「正金
無利息預り手形の禁止は為替会社の信用創造
を制約するものであるだけでなく、さらに正金
準拠率の引き上げからついに全額準拠の強
制に至って、為替会社の預り手形は信用貨
幣からふたたび商業貨幣へと逆転させざるを得
なくなった。そのうえ、全額準拠の要請は為
替会社に原始的な信用創造をすら認めないので
あって、ここに、その近代銀行への発展の
契機は、まったく抑えられてしまった」と
いうのが教授の結論となっている。さらに指
摘したように、発行の方式に重点をおき、こ
れが変化すれば、紙券の本質が決定的に変化
するという説明がここでもみられる。したが
って銀行券は、この流通を規定する商品流
通、あるいはより基本的には資本主義の発達

本論文冒頭

54
銀行券の発行について

によって形態の発展をとげるのではなく、発行方式だけが決定的なメルクマルとなって
いる。また「産業資本の確立」をどの時期においても小さく、その具体的な説明がな
いために、第4形態への転化ともに産業資本の確立があったようにもとれる。また第
4形態への転化は形態だけの発展であって、銀行券への成熟はさらに後の時期をたまなけ
ればならないようにもとれる。いずれにしてもの理的規定が決定的な基準となっているだ
けに、歴史的な判断がどのように入っているのかということを読むとくる場合には、はなは
だしい困難とおまいきさを感じる。

(1) 岡崎『シールド・ビルについて』21頁、吹
春助教授も、岡崎教授がシールド・ビルをイ
ングラント銀行労の先駆と主張されていると
される。吹春寛「金融市場の展開に関する
一試論」『国学院経済学』第29巻第1号、51
頁参照。
(2)(3) 岡崎『前掲論文』21頁。
(4) 田中生夫『書評』岡崎保『銀行券発生史論
——日本銀行券の系譜——』『国学院経済学』
第19巻1号、76頁。
(5) 第1章、為替会社正金無利息預り手形、『銀
行券発生史論』15頁以下。
(6) この相違については、別の機会に明らかに
したい。
(7)(8) 岡崎『前掲書』35頁。
(9)(10) 岡崎『前掲書』35頁。
(11)(12) 岡崎『前掲書』36頁。
(13) この同書は、必ずしも流通を抑えようと
いう意図のものともいかないようと思われ
る。
(14) 岡崎『前掲書』46頁。
(15) 岡崎『前掲書』48頁。
(16) 岡崎『前掲書』69頁。
(17) 岡崎『前掲書』73-74頁。ことに教授が重
視されている貨付との関係がはっきりしない。
(18) 以下引用は岡崎『前掲書』50-52頁。

さて、以上のように岡崎教授の見解をたどってみると、理論的規定が明快であるとも
に、具体的解釈には歯切れの悪さと安易さが

対照的にみられた。そこで最後に、それぞれ
イギリスと日本の銀行券についての教授の見
解を整理し、いくつかの問題点を指摘すること
とにしよう。まずシールド・ビルについては
これを限定をつけながらであるが銀行券の端緒形態と考えられていた。ただし、その根
拠として額面金額の統一、裏書譲渡＝流通性
というメルクマルをとるのは誤りとされた。
この指摘にとづいて、山下・小野銅を批
判されたのである。またシールド・ビル
は、利益であるかけるかは価値であり、これ
を貨付することは、金融債を貨与するのと本
質的には同様であり、信用の貨付、創造があ
ったとはいいえないといわれる。あるいはシー
ルド・ビルで手にわたる貨幣を貨付することは
すでに金納が実行していたことであり、これ
はイングラント銀行を金族から差し、特色
づける意味での信用の貨付、創造があったと
はいえない。このかぎりでは「原始的な信用
の創造」にとどまるといわれる。そしてこの
点が渡辺教授を批判される根拠となってい
る。しかも岡崎教授の批判は一視ではきわ
めて鋭く、正しく。そして創立当初のイング
ラント銀行の評価についての結論にはまったく
賛成である。しかし、これを理由づけられ
る根拠には遠和感と距離を感ずる余りない
ものと小野教授の見解は、岡崎教授が指摘
されるように裏書譲渡の流通性だけでなく重きをおきすぎているように見える。しかし小野教
授の意図は、イギリスにおける資本主義の生
成、そしてこれにともなって生じる商品流通
の発展が為替手形の裏書譲渡を推進し、さら
にもう一つの商業通貨である約束手形の裏書
譲渡を促し、これを背景として押印手形するな
かシールド・ビルの裏書譲渡流通がとめられ
ていることを示そうということにある。いわば資本主義の発達の歴史のなかで、新し
い生産関係の発達を基盤としてこのことがい
われている。裏書譲渡はこのことの具体的指
標にすぎない。ところが岡崎教授は信用貨幣
銀行券の系譜について

の属性という抽象的なメルクマールとして、この裏書議論＝流通性をとり上げられる。したがって、岡橋教授の裏書議論＝流通性は、有価証券一般にとらえる流通性であり、どの時代にもみられるものである。この点では、岡橋教授の批判は小野教授の意図を正確に受けとめられていない。また、渡辺教授の強調されている点は、イングランド銀行が資本金の額までに同額の貨幣を保有しないもので、この手形を発行したことにあった。これは、すでに述べておいたように、渡辺教授がイングランド銀行創設の意義を高利資本の敗退においておさめることと密接な関係がある。イングランド銀行創設が高利資本を決定的打撃を与えたと考えておられることから出ている。そして「形態的な発展をとげ流通しやすくなった」シールド・ビルが「銀行の貸付の能力を拡大した」ことを見出される。またこの手形は「1日につき2ペンスの利子が付いていたけれども、預金の受取証書として発行されたわけではない」といわれることがある。このように渡辺教授の見解をみてゆけば、岡橋教授の批判は、渡辺教授の意図ならびにシールド・ビルが債券としてではなく通貨として役立っている側面をまったく無視しているように思われる。しかし、「租税徴収にあたったクロウジアが租税公金で手形を割引いたことのなかに……近代銀行家の中流形態をみてだし」(1) やり、「イングランド銀行をもって生まれながらの中央発行銀行とする(2)」ことを誤りとされている結論にはまったく贅沢である。

ところでおき、ときに指摘しておいたように、「シールド・ビルについて」では、ランニング・キャッシュ・ノートをシールド・ビルと比較し、前者を為替会社の差押金預り手形に、後者は正金無利息預り手形に擬しておられる。これは前者が、預託金にたいして発行された預り手形であり、後者は利子をとって貸付けられるようになるということから、このように対比されたものである。ところが、シールド・ビルについて、後者をこれを利子付きの債券と考えられるようになり、そこに見解のズレがあったことは、すでに検討したとおりである。ランニング・キャッシュ・ノートについても、『銀行券発行史論』ではたずの如く別に別の判断に変わってしまわれるようにもみえる。もっともこの場合、この変化は、ゴールドスミスの発行したものについてではあるかたずのようにいわれる。銀行券の歴史的発展過程をふりかえってみて貸付の規定が重要であることを強調しながる「たんなる金融の預り証であったゴールドスミス・ノートが銀行券の先駆的形態としてのゴールドスミス・ノートはいわばランニング・キャッシュ・ノートに発展し、まだ商業貨幣であったばかりの前半から信用貨幣としての後者へとその性格の転換していることを理解するうえにも、貸付の規定が重要であって後者はただのノートではなく、それが貸付けられたノートであり、擬制的利子生資本の運動なしには存在しないところに、その特性がある(3)」と。このように、金匠の発行したランニング・キャッシュ・ノートをここで信用貨幣としてみられている。この点は、少なくとも、ときにイングランド銀行のランニング・キャッシュ・ノートを差押金預り手形と考えておられたことと比較すれば、顕著に変化といえることができる。そしてこのように、岡橋教授は、両国の紙幣を比較される場合、厳密に発行の時期を照応させ、また金融機関の性格を考慮すべきだという関心をもっておられないように見える。

ついて問題となるのが、手形についての解釈である。というのは、岡橋教授は為替会社の発行した手形のうち正金無利息預り手形をもっとも重視されていたことは、すでに述べたとおりである。そしてこの手形は、さらに国立銀行振出し手形、銀行鉄貨trinsicながり、結局、日本銀行券への系譜をたどること
銀行券の系譜について

になるといわれる。ところが、この為替会社の金券は、突然、明治維新時代のわが国に銀行券の先行形態として出現したのではない。すなわち、徳川時代の両替商人が発行していた手形、また両替商金融の発展を背景としている。そこで教授の論点はさらに過去にさかのぼる。このようにして徳川時代の両替商人の手形が問題となる。ところでその場合、両替商の預り手形を重視され、両替商の預り手形→為替会社金銭預り手形→銀行預り手形→銀行預金の発展を考察される。そして預り手形の発展の系譜を否定される。これは、教授にとって預り手形を重視であるとするかによって、そのあとの発展系譜における為替会社の金銭預り手形や銀行預り手形の本質規定のうえに重大な違いをもたらすだけではなく、信用貨幣としての銀行券の本質について決定的な重要性をもつ。それによって預り手形を重視するかを論じて、この重要性に無視するようなことにもなりかねないかからである[9]。いう重要な論点に関係があるからである。具体的にいえば、銀行券の源流を、両替商の預り手形に求めると、預り手形に求められるか、つづく為替会社の預り手形の本質を前者の流れとしてみれば預り手形そのものをとることになり、後者の流れとしてみれば預金あるいはその指図証とみるという根本的な違いを生み出すことになる。教授は後者の流れで、すなわち預り手形の重視はここにちじつ小切手、いいかえれば預金の支払義務を銀行券の本質と考えることになり、このような考え方がでは、銀行券の本質規定にもっとも決定的な意味をもつ預貸という契約が入らないとして、預り手形説をとられる。そしてこの観点から寺尾元彦氏の見解に賛成し、松好貞夫教授や長尾男教授の見解を批判される。しかし、後者の両教授は為替商の意図がわからないような内容で、預り手形（振手形）という言葉を使用されているわけではない。松好教授の場合は「預金預貸すなわち振手形[9]」という説明があり、あたかも小切手の振出すように思わせるが、この手形は間接教授がとり上げておられるような「両替商の預金者がその預金にたいして振り出す手形[9]」ではない。すなわち、この点は為替会社は政府より貨幣がこれもまた為替会社によって発行されたもの」と述べられていることも明らかである。いずれにしても、松好教授は間接教授の考えられているような特有な、高い意識の理論的形態規定をもったものとして振手形をとり上げられているわけではない。もっと実際的に問題とされている。またもっぱら預金者から発行したものとし、振手形をとり上げられているものでもない。この点では、間接教授の批判は、やや一方的ではなかったが、さらに間接教授がこの振手形を小切手と同じ形態視される背景に、両者とも貸付けの契約が入らない点で共通であるという考えが示される。しかし間接教授が引用されている「両替商講義」では、振手形が貨幣契約によって過振りとなる場合があることがみとめられている[9]。もっとも間接教授の述べられていることがすべて無意味であるというのではない。それどころか、もし振手形が小切手の性質をもっているとすれば、間接教授の指摘された系譜は誤りではなく、銀行券の系譜からは当然振手形を排除するのが妥当である。しかし、わが国の実際は、このようなに明確に割り切れるのであるだろう。またここでも理論が先行し、重要な資料の検討、実態の把握は二つのつながっているように思われる。そればかりでなく小切手は、「銀行に呈示されるまでのあいだもし流通しても、それは貸付けされた手形（信用）でないから、流通するための為替手形（の一種）として商業貨幣にすぎないが[9]」とされ、「それが銀行に
銀行券の系譜について

示唆されて振替、転記される銀行帳簿上の要求払預金は、貸付けられた信用を化体したもののであるかぎり、信用貨幣ということができるといわれる。つまりどこまでも小切手そのものは信用貨幣ではないことを強調されるが、このように言い切ってしまうことは妥当であろうか。すなわちこの小切手と、他方で信用貨幣と考えられている銀行引受手形とどれほどの相違があるといえるのであろうか。いかえれば、後者は引き受けによって銀行の債務＝信用貨幣を担保付けられたものと考えられるのであられるが、それならば、小切手も少なくとも過払いの部分については信用貨幣が貸付けられ信用貨幣となっているといえるのでなかろうか。さらに両者は銀行組織のなかで果たす役割がちがい、これは歴史的な発展のちかいを基礎にしてはじめて理解できるのではないかであろうか。

また銀行券の本質を「貸付けられた手形」とされることから、兌換の有無は問題となりなくなっている。それどころか「対治6年金兌換国立銀行紙幣がじゅうぶんに流通せず、ははか金との兌換性のなくなった、ただの法幣にしかすぎない改正国立銀行紙幣が、いまやおおむね流通する」ということは、銀行券の流通を支えるものが金との兌換性、金との同一性やその法貸規定制が信用力に役立つに物語っているとといわれる。これを教授が兌換銀行券＝金債務証券説、不換銀行券＝紙幣説を批判され説明された独立で信用貨幣説を展開している。その見解にうまく合致しない、一つの有力証拠を提供しているようにみえる。しかしこのとき、政府紙幣の増発が継続しており、銀価の下落と資本位の金流とという別の条件を考えに入れ、兌換請求をとつじして銀行紙幣が収縮することを同時に視野のなかに入れなければ、この分析は片手落ちになるであろう。ところが、これを銀行券の性格規定という鋭い入れもない射程内で処理される。このような、銀行券の兌換の意義が軽視されていることは、逆に管理通貨の時代になって銀行券と金との制度の結びつきが変化しているという認識を説明する。

そして兌換が現在のように為替化し、間接化した金の自由市場価格・為替相場・物価水準の動向をインフレーションの検証にすぐさま役立つと考えられているのと直ちに連する。すなわち価格標準の事実上の切下げを、管理された市場、相場に無理に、しかも楽天的に求めて、これを指標とされることになる。そして兌換をもっぱら手形説の保証という抽象的な意味にかぎってみられ、これの具体的役割とその機構的な変化また資本主義の変化が軽視されることになる。すなわち信用貨幣説に執着されるかぎりノミナリストの教授が、インフレーションの問題では急速にメタリストに帰結しようとして突然、価格標準の具体的指標を管理された金市場に探し求めることになる。

要するに、岡橋教授の見解は、多くの問題提起や説明的解釈への批判を含み一面では背をあたるものが多くないもの。しかし、銀行券の本質規定にあまりにも焦点をかざされ、これによって銀行券発行史をすべてコンセントに説明しきつそこうまでされているために、かえって錯綜した信用関係の処理に手を焼かれ、紙幣通貨の発達や信用制度の形成についての歴史的説明が不明瞭となっている。そしてよっても、イギリスとわたが国との特徴の差異が消滅している点が、総合的な展望、岡橋教授の日本金融史やかんじるビジョンを不明確なものにしているように思われられる。

(1) 岡橋喜『銀行券発行史論』序論、1頁。
(2) 岡橋喜『前掲書』1頁。なお前掲論文を参照されたい。
(3) 岡橋喜『前掲書』14頁。
(4) 岡橋喜『前掲書』3頁。
(5) 松好貞夫『現代維新における両替商金融』39頁。
(6) 岡橋喜『前掲書』4頁。
(7) 松好貞夫『前掲書』39頁。
銀行券の系譜について

(8) 岡崎保『前掲書』58頁。
(9) 岡崎保『前掲書』11頁。
(10) 岡崎保『前掲書』87頁。
(11) 眞藤素一『国家信用とインフレーション』
　『インフレーション理論の基礎』日本評論社, 109頁を参照されたい。

(12) 田中生夫『書評』「岡崎保『銀行券発生史論』」『国学院国際学』第19巻1号, 84頁。